

在宅診療下における義歯使用に関連する因子**Factors associated with denture use in home care**

○菊谷 武, 古屋裕康, 高橋賢晃, 戸原 雄, 田中公美, 田村文誉

○Takeshi Kikutani, Hiroyasu Furuya, Noriaki Takahashi, Takashi Tohara, Kumi Tanaka, Tamura Fumiyo

日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック

The Nippon Dental University, Tama Oral Rehabilitation Clinic, Tokyo, Japan

高齢者にとって、義歯の使用は失われた咬合支持を回復し、咀嚼機能を維持するために重要である。一方で、在宅要介護高齢者においては、義歯を使用していない者も多く、咀嚼機能の低下の原因になるのではないかと危惧される。本研究は、在宅診療下で義歯を新規に製作した患者における義歯の使用状況と関連する因子を明らかにすることを目的に行った。

【方法と対象】 本調査は、某歯科診療所によって行われた個人宅に対する訪問診療において 2012 年より 2022 年の間に天然歯の喪失により生じた咬合支持領域の不足を補うことを目的に義歯の新規製作を行った要介護高齢者 233 名に対して実施された。検討項目は、年齢、性別、日常生活動作能力 (ADL)、認知機能、宮地の咬合三角、自宅介護者の有無であった。義歯装着から義歯が使用できなくなった期間を義歯の生存日数とし、Kaplan-Meier 法によって検討した。

【結果】 義歯製作後 6 か月後までに追跡不可能であった 63 名を除く 169 名(上顎義歯 148 床、下顎 122 床)が対象となった。さらに、1 年後までの追跡可能であった対象者 139 名についても併せて検討した。6 か月後の上顎義歯においては、ADL の低い者、宮地の咬合三角において C に比較して A または B および D の者が、下顎においては、C に比較して A または B の者の生存日数が有意に低値を示した。12 か月後においては、下顎義歯においては C に比較して A または B の者の生存日数が有意に低値を示した。

【考察】 宮地の咬合三角は義歯の難易度を示す指標として知られているが、要介護高齢者においては、容易な症例とされる A または B の義歯の生存率が最も悪く、困難であるといわれる D の生存率は高かった。要介護高齢者では咬合力が十分でない者が多いこと、義歯の着脱には難易度があることが本結果に影響を与えたと考えられた。本結果は、要介護高齢者の義歯の適応に重要な指標となる。